

河川におけるオオクチバス駆除技術の開発

杉山秀樹（秋田県水産振興センター）

キーワード：オオクチバス・外来魚・駆除・河川ワンド

オオクチバスは、水産業に被害を与えるとともに生態系に影響を及ぼすことから、2005年6月から施行された「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」によって管理対象となる特定外来生物に指定された魚種である。本魚種は、現在、東北のすべての県において生息が認められており、積極的な駆除が行われている。しかし、その実施場所は閉鎖的水系である天然湖沼や灌漑用ため池が主体で、河川において実施されている事例は少ない。この背景には、河川における駆除については、駆除方法が確立されていない、被害の実態が十分に把握されていない、駆除による効果が把握しにくいなどの理由があると推察される。河川におけるオオクチバス駆除に関し、秋田県内における活動を通じ、いくつかの知見が得られたので報告する。

【方法】

秋田県では、河川漁協、国交省、自然保護団体などにより2000年以降、米代川、雄物川、子吉川の一級河川で年に10回前後のオオクチバス駆除が実施されている。これらにより得られた知見に基づき、実施場所、実施方法などを検討した。

【結果及び考察】

河川本流における駆除は、船舶を使用し河川内に設置したさし網に追い込むようにして行われている。この手法は、子吉川、米代川などで行われているが、オオクチバスの生息場所が特定できない、さし網の設置可能な場所が限定されるなどから、採捕尾数はきわめて少ない場合が多い。

一方、河川ワンドは、これまでの実績から判断すると、効率的で効果的な駆除の実施場所と考えられる。ワンドとは水制、中州、寄り州、支川の流入などにより形成される河川敷の湾入部で、本川と連続した静穏域である。ワンドにはアシなどの抽水性の水生植物が成育していたり、湧泉が存在し冬季でも水温が高い場所があったりして、多くの魚類に越冬場所や産卵場所を提供している。オオクチバスの場合も、ワンドに周年生息しているものがあるほか、越冬期や産卵期に本川から移動してくるものがある。この習性を利用し、ワンドにおいて、さし網、定置網、投網などを使用することにより、集中的、継続的な駆除が可能となる。

これまでに得られた知見に基づき、ワンドにおける駆除方法について述べる。

- ①固定したさし網に地びき網により追い込んだり、さし網を岸と平行して設置する。定置網・地びき網は、時期、設置場所によっては効率が低い場合がある。
- ②沈木などの障害物がある場合は、その周辺にさし網を設置し追い込む。冬季は効果的である。
- ③岸寄りで視認できる個体は投網により採捕する。産卵期は効果的である。
- ④表面が凍結する厳寒期に、氷を割りながら張り網に越冬個体を追い込む。
- ⑤産卵期には、産卵床を保護する親魚を発見し、投網や小型さし網で採捕する。
- ⑥岸寄りの障害物周辺、礫底、マコモやアシの根などに産卵床が形成されるので、その場所を探し、産着卵を取り上げる。
- ⑦産着卵除去装置（宮城内水試で開発した人工産卵床）は、ワンドにおいても効果的である。ただし、受精卵は3日前後でふ化することから、この間隔で産卵の有無を確認する必要がある。
- ⑧仔魚、稚魚をすくい網により大量採捕する。
- ⑨体長3cm以上の稚魚は、コイ科やハゼ科の稚魚を捕食するので、積極的に駆除する。

以上述べたとおり、河川においてはその周辺水域に生息している本種をワンドが集めることから、そこで様々な手法を組み合わせ継続的に駆除を実施することにより、水域全体の生息数を減少させることが可能と推察される。